

シンポジウム
キム スギョン
 「北に渡った言語学者・金壽卿 (1918-2000) の再照明」
 趣旨説明

板垣竜太

キム スギョン 金壽卿は 1918 年に江原道通川郡カンウォンド トンチョングンで生まれ、京城帝国大学予科を経て、1937 年に同大法文学部哲学科に入学した。1940 年の卒業後に、東京帝国大学文学部言語学講座（大学院）に入り、1944 年には京城帝大の朝鮮語学研究室の嘱託となった。1945 年 8 月の日本の敗戦はソウルで迎えたが、1946 年 8 月に北朝鮮（1948 年 9 月以降は朝鮮民主主義人民共和国）に渡り、同国の言語学・言語政策において大きな影響力をもった言語学者である。たとえば現在「労働」という単語について、南では「ノドン (nodong, 노동)」で北では「ロドン (rodong, 로동)」と表記する。この表記法が北朝鮮で確定される際に理論的根拠を提供したのが、金壽卿が 1947 年に『労働新聞』に発表した論文であった。彼は 1940 年代から 1960 年代まで、同国の言語学の中軸を担った。その後 1980 年代後半から研究活動を再開し、2000 年に平壤で亡くなるまで活躍した。金壽卿については、今回の報告者の 1 人であるチェギョンボン崔炅鳳氏（圓光大）が先駆的な研究を公表している¹⁾。ただ、その歩みはまだ本格的には解明されていない。

本シンポジウムは金壽卿の生涯と研究について多角度から検討することで、北朝鮮の言語政策・言語理論のみならず、植民地時代および冷戦期における学問や、南北分断状況における家族といった問題まで考える。言語という側面から北朝鮮を照明することは、同国に関する冷静な学術研究が求められる現状において、新鮮な視点を提供すると考える。

本シンポジウムの企画経緯について、ここで少し説明しておきたい。この企画の発端となったのは、2010 年春のある出会いであった。2009 年から 10 年にかけて、私（板垣）は在外研究で米国に滞在した。その期間中にある調査のためにカナダのトロントに行っ

た。その目的は、朝鮮半島北部出身者のインタビューをすることだった。トロント郊外で、ある方のインタビューを終えた後、夕食時、今日の講演者である金^{キム}恵^{ヘヨン}英さんがいらっしやった。カナダでは、配偶者の姓にしたがって Hye-Young Im とのお名前前で、トロント大において教鞭をとっておられた。夕食の場が郊外だったので、親切にも帰りに私を車で市内のホテルまで送ってくださった。その車中で、「実は父が北朝鮮で言語学者だった」というお話をしてくださった。ご自身も平壤で生まれ、朝鮮戦争の時に父と生き別れになってしまった。そして1960年前後に父が北で言語学者として活躍しているという話を知り、その後、カナダに移民をした。1980年代に再会を遂げ、その再会後に金壽卿を主人公にした小説も出版された。短い時間ではあったが、およそそのような話をうかがった。非常に印象的な話だったので、私の頭に深く刻みこまれた。

ただ、その時は私自身がまだ北朝鮮の言語学や金壽卿について知識も関心も有しておらず、そのままになっていた。2012年11月、同志社大学の近所の店で、本学のコ・ヨンジン先生と話をしているなかで、「金壽卿という言語学者は1940～60年代にかけて、北朝鮮の言語学の基礎を作った人物だ」という話を聞いて、私の記憶が蘇ってきた。「確か、その娘という方にトロントで会った」と言って、ノートパソコンを開き、その時のメールのやりとりを見て、そのことを確認した。その場で、「ぜひ Hye-Young Im さんと呼んで、講演会を開こう」と話が盛り上がった。それが初期の企画内容だった。ちょうどその頃、人文科学研究所で2013年度に東アジアに関する国際シンポジウムを構想しており、この企画をその一環として開催することになった。それをきっかけに話がさらに大きくなり、韓国・中国・東京から研究者を呼ぶ国際シンポジウム企画となったのである。

本企画の中心は、金壽卿の実の娘・金恵英氏（トロント大）と実の息子・金^{キム}泰^{テソン}成氏（釜山大）による特別講演「父、金壽卿」である。金壽卿は朝鮮戦争時に家族と離ればなれになったが、1980年代末以降、再会をとげる。シンポジウムでは、その家族離散と再会の経験を中心に語っていただいた。お2人が公の場でこの話を語るのはこれが初めてのことであった。

こうしたパーソナル・ヒストリーを中心に置きながら、専門の研究者をパネリストとして招き、金壽卿の業績や生涯について学術的・総合的に論じた。

第1部「北朝鮮の言語学・言語政策と金壽卿」では、まず金^{キム}河^{ハス}秀氏（延世大）が、その後の専門的な議論に先立つ講演として、北朝鮮の言語政策および言語学史を総論的に論じた。次に崔^{チュ}炅^{ギョ}鳳^{ボン}氏（圓光大）が、コリア語研究史のなかで金壽卿の業績を実証的に位置づけた。

第2部「金壽卿の国際的な照明」では、日本・旧ソ連・中国のそれぞれの観点からの議論を提示する。まず、コヨンジン氏と私（板垣）が、金壽卿の朝鮮語学を、植民地時代の知的形成や日本との関係から論じた。次に趙義成氏（東京外国語大学）が、ソ連の言語学の影響という観点から金壽卿の位置づけを論じた。そして、中国の朝鮮語学の元老研究者である崔義秀氏（青島濱海学院）が、中国朝鮮族の言語学への金壽卿の影響を語った。

このほか、平壤で金壽卿から直接学んだことのある崔應九氏（北京大）より特別寄稿があり、シンポジウム当日に読み上げられた。また、私と金壽卿のご遺族の合作で、可能なかぎり詳細な年譜を作成するとともに、知り得たかぎりにおいて著作目録を整理した。現時点で最も正確で詳細な資料であると信じている。

シンポジウム当日は、専門家から一般の方々まで、多様な参加者があった。インターネットでの中継もおこなった。当日の報告集は余裕を見て300部印刷したが、来られなかった方にも渡したいとまとめて持って帰る方がおられたり、お世話になった方々などに後日送ったりしたため、ほぼ在庫切れとなった。関心の高さがうかがえる。

今回、人文科学研究所の『社会科学』に掲載するにあたり、コリア語によって記録を残すことにした。当日の報告は、私（板垣）を除いて、コリア語でおこなわれたこと、韓国の研究者を中心としてコリア語ができる方々がこのシンポジウムの内容に最も強い関心を有していると考えられること、『社会科学』は同志社大学学術リポジトリを通じてインターネットで読めること、などを総合的に考慮した結果である。学問の公共性は本来国境を越えるものであることにも鑑み、理解していただければ幸いである。ただし、近いうちに、日本語版は単行本として公刊する予定であり、そちらも期待していただきたい。

注

- 1) 최경봉 「제 3 회 2006 년 東崇學術財團이 선정 한 언어학자 金壽卿 (1918-1999)」, 『財團法人 東崇學術財團消息』 제 11 호, 2007; 「金壽卿의 국어학 연구와 그 의의」, 『한국어학』 45 호, 2009.

